ディケンズにおける「探偵的」眼差し

玉井 史絵

パム・モリスはリアリズム的表象に通底する認識とは、物質的世界に関する情報共有の必要性であると述べている（Morris 44）。しかし、言語によって再構築された「現実」に関する情報共有の方法や目的は、作家や時代によって異なるのは言うまでもなく、一人の作家、一つの作品のなかにも揺らぎがある。ディケンズの作品においては、読者の共感を誘う「共感的眼差し」と、特定の人物を排除し秩序を維持することを目的とした「探偵的眼差し」が交差している。D・A・ミラーは『警察と小説』（1988）において、リアリズム小説の時代は警察が組織として発達した時代であることに着目して、小説と警察の不可分の関連性について論じている（Miller 58-106）。物語のあらゆる側面が牢獄の秩序の要素となりうるというミラーのフーコー的解釈は、この小説を一面的にしか捉えていないとする批判もある。『荒涼館』や 1850 年代の警察に関するディケンズのエッセイには、監視や秩序への欲求を見ることもできるが、同時に探偵や警察による支配とは異なる方法での秩序を志向している側面もあり、それが探偵的眼差しに対抗する共感的眼差しとして表されているのである。

警察は 19 世紀半ばのイギリス社会で無条件に歓迎されたわけではなかった（Collins 217, Morris 684-85; Joyce 111）。衛生改革の推進者であったエドウィン・チャドウィックは警察改革にも積極的で、「予防警察論」（1829）を執筆して中央集権的システムのもとで人民を監視する警察組織の必要意を訴えた（Tobin 149）。1829 年にはチャドウィックの助言のもと、ロバート・ピールによって首都警察が設立され、1842年に事件捜査のための探偵部門が発足した。しかし、イギリス人のアイデンティティの根幹には、抑圧的な大陸のカトリックの敵と戦う自由の民であるとの意識があったため、彼らは常に中央集権的官僚主義に対して懐疑的であった（Goodlad 144）。新警察の設立にあたっては、法の実行者として秩序を守ると同時に、公僕として市民の感情に寄り添うという、二つの異なる役割を満たす必要があったのである（Joyce 116-17）。概して官僚的な政府の役人に対して批判的であったディケンズが、新警察に対して惜しみない賛辞を送っていたことは有名で、チャドウィックが提唱する中央集権的組織への支持を表明している。だが、探偵警察（Detective Police）に関する一連のエッセイでは、新警察が市民の自由を妨げる監視装置であるという印象を与えないようにする工夫も見られる。「探偵警察団Ｉ」（1850）の冒頭で筆者は、非効率で無能なボウ・ストリートの旧警察とは対照的な新警察の効率と有能さを称賛する。「刑事警察部門は、大変よく選抜され、訓練されていて、組織的かつ静かに働き、職人のように仕事をし、いつも冷静かつ確実に一般市民のサービスに携わっているので、市民はそのことについて十分知らないし、その有用性の十分の一も理解していない」（Slater 267）と筆者は述べる。あまりにも効率的であるがゆえにその存在が感じられない――これは市民を監視しつつ、自由を保障するというジレンマを解決する巧みなロジックである。探偵警察のもう一つの特徴は、抑圧的権力を行使しながらも、共感的眼差しに通じる慈悲深さも併せ持つという点である。「フィールド警部と勤務して」（1851）では、警察の組織的監視活動によってロンドンの貧民が効果的に制御される様が描かれる一方で、「フィールド警部」という個人に焦点を当てることにより、監視装置としての警察にある種の人間味を持たせる工夫がなされている。貧民たちはフィールドの絶対的権力に服従しつつも、彼に親しみの感情を抱いて温かく迎え入れる。これはアントニオ・グラムシのいう強制と同意による支配にも通じる（Joyce 116-17）。

これらのエッセイに見られたディケンズの警察への賛辞と秩序への志向は、『荒涼館』へと引き継がれていく。『荒涼館』が分冊形式で出版された 1852 年から 53 年は、チャーチズムや 1848 年のフランス二月革命、1848 年から 49 年にかけてのコレラ第二波の記憶がまだ新しく、人々は労働者階級の反乱や革命の脅威とともに伝染病の脅威を感じていた時代であった。『荒涼館』ではこれらの脅威が、小説冒頭の泥にまみれたホルボーンの描写やトム・オール・アローンズの描写を通じて、秩序破壊の危険性として表されている。この混沌とした社会にあって探偵的眼差しで社会を監視するのが、弁護士タルキングホーンとバケット警部である。モリスはタルキングホーンを「効率的で、人間味がなく、高度な知識を持った国家の役人」（Morris 688）と評し、彼の人物造形をチャドウィックに重ね合わせている。しかし、タルキングホーンは、モリスの言う近代的官僚というよりは、貴族社会と分かちがたく結びついた旧社会の官吏であり、情報の独占に基づく彼の抑圧的態度は、アンシャンレジームの専制的支配を想起させる。チャドウィックが考案した中央集権的官僚組織を体現しているのは、むしろバケット警部のほうである。フィールドとバケットの描写には多くの共通点がある（Collins 206-07）。バケットはフィールドと同様に鋭い観察眼の持ち主であり、ランプを手に、文字通り貧困の暗闇を照らし出す。バケットの卓越した観察力や、無秩序な力を制御し監視しようとする欲求は、のちの推理小説に引き継がれていく要素となる。タルキングホーンが冷酷な官吏であるなら、バケットは市民に仕える公僕であり、「改革の理想のモデル」である（Thomas, 143）。バケットはフィールドと同じく、出会う人々と旧知の友のように接して魅了し、彼らの感情に寄り添う一方、秩序を守るための抑圧的な行為は職務（duty）として粛々と執行する。ベス・フォークス・トビンは「バケットは道徳秩序の力として機能している」と述べ、貴族階級による支配の終焉後に生じた空白を埋める「監督者的地位」にあると論じている（Tobin 151）。タルキングホーンが情報を独占し、「沈黙の金庫」（23）のように秘密を隠すことで権力を得るのに対し、バケットは秘密を明らかにすることで権力を得る。『ドンビー父子』（1848）に登場する「善良な精霊」（738）のように、最も豊かな社会と最も貧しい社会両方に潜む秘密を白日の下に曝すのである。総じて慈悲深い公僕であるバケットであるが、探偵としてのバケットは時として物語を支配し、他者を支配することに

快楽を覚え、冷酷なまでに当事者の感情には無関心であるという点においては、タルキングホーンと似通っている。浮浪児のジョーを追い立てる際に憐憫の情はなく、デッドロック卿に対して夫人の過去を暴くときは、カードを弄ぶホイスト・プレーヤーに譬えられている（816-17）。このゲームの比喩は「探偵警察団 Ｉ」でも使われていて、様々な事件捜査は「生きた駒を使ったチェスのゲーム」（Slater 282）と表現されている。犯人であれ被害者であれ、事件に関わる人々の感情に対する無関心と、物語を支配する特権的能力もまた、のちの探偵小説に引き継がれる特徴となっていく。他方「推理」という観点から言えば、バケットはのちの探偵とは決定的に異なる。バケットの最大の手柄は、オルテンスをタルキングホーン殺しの犯人として逮捕することだが、これは推理というよりは啓示、直感に基づくものである（Ben Merre 61）。革命の恐怖を暗示するオルテンスの排除による秩序の回復が目的であるプロットにおいて、探偵の推理は不要な要素なのである。

『荒涼館』において、警察とは異なる方法で秩序の回復に重要な役割を果たすのが、エスタ・サマソンと医師のアラン・ウッドコートである。この二人はともに、貧しき者や虐げられた者に寄り添い、結果的に彼らの抵抗のエネルギーを制御する人物である。エスタは「どちらかと言えばよく気がつく・・・自分の前で起きていることに静かに気づく」（28）観察眼を持ち合わせているが、その眼差しは他者の気持ちを想像しようとする共感的眼差しである。エスタはパーディグル夫人に連れられてレンガ職人の家の訪問に誘われた際、「自分とは全く異なる境遇にある人々の心に自分の心を合わせ、適切な視点からその人々に語りかけることができるだけの十分な経験がない」（128）と語る。エスタは「心を合わせる」共感の重要性や、他者のすべてを知りえないという知識の限界を認識しているのである。ウッドコートもバケットと同じく、鋭い観察眼の持ち主だが、その眼差しには「同情的関心」（711）があると三人称の語り手は述べている。ウッドコートがレンガ職人の妻の足の傷を治療する際、足についた泥から彼女の境遇を読み取る場面はホームズを想起させ、この小説の中でも最も推理小説に近づいた瞬間だと言える。しかし、ウッドコートの眼差しの目的は真実を追求することではなく、その背後にある女性の悲しみを知ることである。ウッドコートは女性の言葉に静かに耳を傾けて寄り添い、心身両方の傷を癒すのである。エスタとウッドコートを特徴づけるのは、貧しき者たちへの「身体的接触と同情的知識」、他者との「親密な近接性」であり、ミドルクラスの中央集権的ヘゲモニーとは異なる価値観と視点を提供しているとモリスは指摘する（Morris 694）。二人は探偵とは異なる原理による秩序の回復を試みているのである。

以上、『荒涼館』におけるタルキングホーン、バケットの探偵的眼差しと、エスタとウッドコートの共感的眼差しを分析した。ディケンズはそのキャリアの最初から「見る」にこだわり、見たことを言葉で表現することによって、物事や人物の背後に潜む「真実」を明らかにし、社会を改革しようとした作家であった。探偵的、共感的という二つの眼差しは、ディケンズの作品に通底する、貧しき人々への恐怖と憐憫という、深く関連し相反する側面を示している。ディケンズは貧しき者たちへの共感を表現しながらも、いつ反乱を起こすともしれない暴力的な民衆に対する恐怖の念も抱いていた。新救貧法に象徴される功利主義的社会改革や官僚主義には反発しつつも、監視による秩序維持の必要性をディケンズは排除できず、そのジレンマが『荒涼館』における探偵の誕生へとつながっていったと考えることができる。イギリスのリアリズム小説においては、「しばしば共感的想像力が合理的な客観性よりも、現実の側面に近づくことができる信頼性のある指針であった」とモリスは述べている（Morris 80）。こうした共感的想像力を重んじるリアリズムの傾向は、ヴィクトリア朝後期になるにつれ、ジョージ・ギッシングが用いたような、共感を極力排除して現実世界を描写する手法へと変化していく。ホームズの推理小説は、ディケンズの小説に見られる道徳的使命感からは解放され、観察に基づいて真実に至る推理のゲーム的要素によって、読者を楽しませる。探偵ホームズは、犯人は言うまでもなく、被害者の感情にも驚くほど無関心である。他者に対する共感的想像力を発揮するのは、ホームズではなく、語り手のワトソンのほうである。そして、そのワトソンの存在こそが、シャーロック・ホームズのシリーズに多層的な魅力を与えていると言えるのかもしれない。

【主要参考文献】

Ben-Merre, David. “Wish Fulfillment Detection, and the Production of Knowledge in *Bleak House*.” *Novel: A Forum on Fiction* vol. 44, 2011: pp. 47-66.

Collins, Phillip. *Dickens and Crime*. 3rd Edition. Macmillan, 1994.

Dickens. Charles. *Bleak House.* Ed. Nicola Bradbury. Penguin, 1996.

---. *Dombey and Son.* Ed. Peter Fairclough. Penguin, 1985.

Lauren M. E. Goodlad. (2000) “‘A Middle Class Cut into Two”: Historiography and Victorian National Character.” *ELH,* vol. 67, 2000: pp.143-178

Joyce, Simon. *Capital Offence: Geographies of Class and Crime in Victorian London*. U. of Virginia P, 2003.

Miller, D. A. *The Novel and the Police.* U of California P, 1988.

Morris, Pam. “*Bleak House* and the Struggle for the State Domain.” *ELH,* vol. 68, 2001: pp. 679-98.

--- *Realism*. Routledge, 2003.

Slater, Michael (ed). *Dickens’Journalism: Vol 2: The Amusements of the People and Other Papers: Reports, Essays and Reviews 1834-51*. Dent, 1996.

Tobin, Beth Fowkes. *Superintending the Poor: Charitable Ladies and Paternal Landlords in British Fiction, 1770-1860*. Yale UP, 1993.

Thomas, Richard R. *Detective and the Rise of Forensic Science*. CUP, 1999.